

虚構的情動のパラドクス

:映画のモンスターを怖がることはいかにして可能なのか

松本大輝 (Hiroki Matsumoto)
東京大学 人文社会系研究科 美学芸術学

本発表では、1975年以降主に英語圏の美学でさかんに議論されてきた「虚構的情動のパラドクス」に焦点をあて、それに対する「シミュレーション論者」からの解決を検討する。

フィクション鑑賞において我々は、登場するキャラクター（ないし出来事）に憧れや愛着、嫌悪や妬み、恐怖や憐憫といったものを抱くことが少なからずある。また、ホラーやメロドラマといったジャンルの諸作品においては、このような虚構的情動を引き出すことがその作品評価にとって決定的ですらありうる。

虚構的情動のパラドクスは、このようなフィクション鑑賞における鑑賞者の情動的反応をめぐる哲学的パズルである。そこで問題とされてきたのは、鑑賞者が虚構上のキャラクター（ないし出来事）に抱く情動は、通常の情動と同種のものとして考えてよいのか、ということである。

鑑賞者がホラー映画に出てくるスライムに恐怖を抱く場面を考えてみよう。たしかに鑑賞者には発汗や心拍数の増加といった、通常の恐怖と共通する生理的変化が見られる。だがその一方、鑑賞者はそのスライムから逃げるために、映画館から飛び出すといった行動はとらないし、そのような傾向すら持たない。というのも、鑑賞者はそのスライムが実在するものだと考えておらず、自らに危害が及ぶとは考えていないからである。では、はたしてその状況で我々は、この鑑賞者が本当にそのスライムを怖がっていると考えてよいのだろうか。これが虚構的情動のパラドクスを支える基本的な問題意識である。

現在、虚構的情動のパラドクスは次の3つの命題の組から矛盾が帰結するものとして定式化されている。

- (1) 鑑賞者は映画に出てくるスライムに恐怖を抱いている。
- (2) 鑑賞者はそのスライムが実在するとは信じていない。
- (3) ある人があるものに恐怖を抱くには、その人はそれが実在すると信じていなければならない。

これらはそれぞれ一定の直観的妥当性を有するが、すべてが同時に真であるとする矛盾が帰結する。よって、虚構的情動のパラドクスを解決するにあたっては、これらのうち少なくともひとつを否定する必要がある。このパラドクスには多くの解決策が提案されてきたが、本発表ではその中で説得的なものひとつと思われる「シミュレーション論者」による諸解決策を取り上げ、検討する。

発表は以下のように進む。まず、このパラドクスを (i) 虚構的情動が本物の情動であるか（虚構的情動の真正性）をめぐるものと、(ii) 虚構的恐怖が合理的であるか（虚構的情動の合理性）をめぐるものとに分ける。次に、シミュレーション論者による議論を概観する。シミュレーション論者の基本的なアイディアは (A) 人間には一定の状況を想像し、その状況下で起こるであろう情動をシミュレートする能力があり、かつ (B) フィクション鑑賞における情動的反応もこの能力に基づいて生み出される「シミュレートされた情動」の一種である、という2点に要約される。

このアイディアを踏まえ、虚構的情動の真正性と合理性とについて、シミュレーション論者がなす回答をそれぞれ検討する。その過程を通じて、以下の4点を順に主張す

る。

第一に、虚構的情動をシミュレートされた情動の一種として考えるシミュレーション論者の議論には、一定の妥当性がある。というのも、虚構的情動と通常的情動との間の違いを、シミュレートされた情動と通常的情動との違いとして説明できるからである。

だが第二に、虚構的情動を真正な情動とみなすか否かについて、シミュレーション論者の中で見解は一致するとは限らない。というのも、シミュレートされた情動がそもそも真正な情動なのかをめぐって、立場が分かれうるからである。

第三に、虚構的情動の合理性について、シミュレーション論者の論点には以下の二つがある。まず一点目として、シミュレーション論者は、我々が虚構的情動を抱くということ一般の合理性をシミュレートされた情動一般の合理性から、すなわち我々に心的なシミュレーションの能力が備わっていることの合理性から擁護できる。この点についてはおそらくシミュレーション論者の見解は概ね一致すると思われる。だが、二点目として、個別具体的な虚構的情動が合理的か否かの判断基準については、シミュレーション論者の中で、(I) シミュレートされた情動の合理性の判断基準をそのまま適用すべきとする立場と (II) シミュレートされた情動の合理性の判断基準とは別の判断基準を適用すべきとする立場、の二つに分かれうる。

第四に、上の (I) に基づくシミュレーション論者の議論は、教育的効果などを狙った特定のタイプのフィクション作品については有効ではあるものの、我々のフィクション鑑賞の実践を幅広く見たときには、擁護することが困難である。よって、シミュレーション論者による虚構的情動の合理性についての説明は上の (II) の立場の方針を採用すべきである。